

【論文】

越境的な文化人ネットワークとその機能
糸魚川におけるハイブリッドな文化空間の形成Transboundary Cultural Networks and their Contributions
to the Construction of Cultural Places in Itoigawa, Niigata本田 量久[†]

1 問題関心 ― 文化人ネットワークの形成と地域価値の創造

今日、多くの地方都市では、人口減少が続き、地域経済の停滞が構造化されるなか、行政、観光協会、旅行者／従事者、観光施設、地域住民などの多様な主体が協働することで、観光振興を推進し、交流人口や移住者の拡大、地域経済の活性化、文化交流を図る動きが展開されている。地域活性化や観光振興を推進する重要な条件として、地域資源（文化、歴史、伝統、自然環境、景観、ライフスタイルなど）の有効活用、さらには新たな価値の創造を挙げることができるだろう。

そして、それが可能になるためには、R.パットナムが論ずる結束型社会関係資本が重要であり、そのまちを熟知し、また高いシヴィック・プライド（愛着や誇り）をもった人びとのローカル・ネットワークが効果的に機能することが社会的条件になる。このようなローカル・ネットワークに加えて、移住者、在日外国人、観光客といった外部者は、地域住民とは異なる第三者の視点から地域資源の価値を評価し、地域活性化に貢献することが期待できる。この過程を通じて、地域住民と外部者は、協働的なネットワークを形成し、多様な主体を巻き込みながら、橋渡し型社会関係資本を拡大するだろう。ただし、J.アーリが指摘するように、ある特定の場所を拠点とした社会関係資本に着目するパットナムの議論は静態的であり、必ずしもネットワーク構築の実態に即しているとは言えない(Urry 2007: 199-200)。むしろ、ローカル・ネットワークであろうと、越境的ネットワークであろうと、特に流動性が高まる近代においては、複数の拠点を移動する人たちが特定の場所に合流し、橋渡し型社会関係資本を蓄積しながら、つながりを拡張していくのが一般的であろう。以上のような過程のなかで、地域内外を往来する人たちのネットワークが拡大し、新たな地域価値を創出する推進力を生み出さう。

このような多様な主体を巻き込んだネットワークによる共創的实践とその効果に関する議論は、R.フロリダの創造都市論などにもつらなるだろう。フロリダらによれば、多様性に開かれたネットワークは、

[†]東海大学観光学部教授 kazuhisa-h@tokai-u.jp

さまざまな視点や能力をもった人びとを結び付け、新たな価値を相乗的に創出する原動力になる(Florida 2003)。

では、文学や芸術などの領域で活動する文化人のネットワークはどうであろうか。優れた文化人は、天賦の才と能力を発揮して独特な世界を生み出す存在であると一般的に認識されている。しかし、実際のところ、文化人の実践とその成果は、必ずしも個人の能力や努力だけに還元できるものではない。みずからの能力を最大限に伸ばすためには、卓越的な文化人と交流し、時代や地域を越えて高く評価された芸術作品に触れながら、みずからの視野を広げることが重要である。また、幅広い社会的評価を得て、活動の場を広げるためには、R.パトナムが論ずる橋渡し型社会関係資本が重要な条件になるし、この条件を有効に活用できる文化人こそが後世に残る大きな仕事を成し遂げられる。たとえ天賦の才をもった文化人であっても、自己完結した閉鎖的な世界に埋没し、社会的評価を得られないならば、活躍のチャンスは大きく制約されるはずである。

歴史に名を刻んだ卓越的な文化人は、どのような社会的条件のもと、いかなるネットワークを形成するのだろうか。また、このような文化人ネットワークは、どのような社会的・文化的効果をもたらすのだろうか。このような問題関心にもとづき、本論では、時代をさかのぼり、20世紀初頭から1980年代に至る、新潟県糸魚川市を拠点とした文化人ネットワークの形成過程とその歴史の変遷に着目し、特に、翡翠園、玉翡翠園、谷村美術館といったハイブリッドな文化空間の創出とその効果について考察してみたい。

2 文化人が集まり、ネットワークを形成する場所

(1) 近代化／都市化と文化人ネットワークの形成

19世紀半ば、情報技術や輸送技術の発展に伴い、国境を越えた人口移動が活発化した。ヨーロッパの歴史的文脈では、自国における政情不安定から自由を求めるといった政治的動機とともに、豊かになりたいという経済的動機に触発された人口移動が拡大し、北米への移住者が急増した(Bryceson 2020: 33)。特にニューヨークやシカゴなどの大都市は、国内他地域からの移住者のみならず、ヨーロッパやアジアからの移民を吸収しながら経済的に発展していった。この過程で形成されたエスニック・コミュニティは、移民が自国の家族・知人に雇用や生活環境に関する情報を発信する越境的ネットワークの拠点として機能し、連鎖移住を促進した(Bartram et al. 2014)。

日本人の国内外における人口移動はどうであろうか。日本は、1873年に岩倉具視を全権大使とする使節団を欧米諸国に派遣し、また多くの「お雇い外国人」を受け入れながら、新たな科学技術を吸収すると、着実に近代化を推し進めていった。東京などでは都市インフラや交通網が整備され、経済活動が活発になった結果、労働需要が拡大し、好条件の雇用を求める人びとが地方から都市へと流入した。さらには、ハワイ、北米大陸、中南米へと移住する労働者が増加するなど、国境を越えた人口移動が拡大していった。

このような歴史的展開が進行するなか、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、日本と欧米諸国の間で文化人の往来が活発になった。その結果、日本は、経済的・産業的・技術的発展のみならず、欧米諸国から学問や芸術を吸収しながら文化的に成長していった。東京や京都などで高等教育機関が創設されると、欧米諸国の先進的な学問を学びたい若者が各地から集まり、20世紀における日本の学問的・文化的

発展に貢献した。

たとえば、東京医学校¹⁾では、森鷗外(1862~1922年、島根出身)がドイツ人講師らによる講義を聴講しながら医学を学んだ。卒業後に陸軍軍医として勤務した森鷗外は、1884年にドイツに留学し、細菌学者ロベルト・コッホ(1843~1910年)に師事したが、帰国後は、徳富蘇峰(1863~1957年、熊本出身)らの民友社(1887~1933年)が発行する雑誌『国民之友』に浪漫主義文学の先駆けとなる小説『舞姫』(1890年)を発表し、幅広く文芸活動を展開しながら文学界を牽引した。たとえば、森鷗外は、写実主義を訴える坪内逍遙(1859~1935年、美濃加茂出身)と文学論争(1891年)を繰り広げるなど、日本文学の行方に大きな影響を及ぼす存在であった。また、1919年に文部省が創設した帝国美術院(現日本芸術院)で初代院長に就任するなど、領域を越えて卓越した文化人として高く評価されていた。

東京大学でも、全国から集まった若者が外国人講師を含む各分野の研究者のもとで学び、さまざまな領域で活躍した。たとえば、アーネスト・フェノロサ(1853~1908年、米国出身)は、東京大学で教えていた動物学者エドワード・シルヴェスター・モース(1838~1925年、米国出身)の勧めで1878年来日し、1886年まで東京大学において、哲学、政治学、経済学の講義をした。フェノロサの講義を聴講した著名人として、岡倉天心(1863~1913年、横浜出身)、坪内逍遙らを挙げることができる。フェノロサは、もともと日本の芸術に関心があったことから、のちに岡倉天心らと幅広い文化研究を展開し、薬師寺東塔を「凍れる音楽」と評したことで有名である。1887年には、岡倉天心とともに東京美術学校(現東京芸術大学)の創設に貢献した。

多くの文化人を輩出した早稲田大学の前身である東京専門学校²⁾は、1882年に創設された。東京大学と同様に外国人講師がおり、たとえば、文学者ラフカディオ・ハーン(1850~1904年)³⁾は、東京大学(1896~1904年)や早稲田大学(1904年)で英文学を教えた。また、東京大学で学んだ坪内逍遙も早稲田大学で英文学や演劇の講義をするなど、若者の教育や日本の文化的発展に貢献した。この時代にラフカディオ・ハーンや坪内逍遙に学んだ著名な文化人として、後述する相馬御風(1883~1950年、糸魚川出身)や會津八一(1881~1956年、新潟出身)⁴⁾らを挙げることができる。

このように、優れた日本人研究者のみならず、欧米諸国から各分野の専門家が集まった高等教育機関は、若い文学者や芸術家を生み出し、また、ここで言及した卓越的な文化人が結節点^{ハブ}となって、領域横断的で越境的なネットワークの形成・拡大に寄与した。さらに、この時期に創設された帝国美術院/日本芸術院などの団体は、それぞれの領域で活躍する芸術家が相互につながっていく拠点となり、文化人ネットワークが拡大する媒介となった。加えて、19世紀後半以降に発展した、新聞、雑誌、書籍などの言論空間は、思想、文学、音楽、芸術などをめぐる遠隔的・非対面的な議論を可能にし、ときに論争を経ながら、領域横断的な文化的発展を推進した。

(2) 実業家の文化的貢献 —— 美術館という「舞台」

そして、日本の近代化過程において、文化活動の推進と文化人の成長に寄与した実業家の存在について論じないわけにはいかない。たとえば、実業家の大原孫三郎(1880~1943年)⁵⁾は、故郷・倉敷のインフラ整備に大きく寄与するとともに、1902年に倉敷日曜講演会を開始し、東京専門学校の創設者である

大隈重信(1838~1922年、佐賀出身)、新渡戸稲造(1862~1933年、盛岡出身)、徳富蘇峰といった全国的に著名な知識人を招聘するなど、文化的な社会事業を通じて、倉敷を「成熟した市民社会」にしようと努めた(兼田 2012: 95-122)。また、大原孫三郎は、奨学金事業や経済的支援を通じて、多くの芸術家の育成に貢献し、企業メセナの先駆的存在となった。特に洋画家の児島虎次郎(1881~1929年、岡山出身)⁶⁾は、大原孫三郎から多額の活動資金を与えられて、ヨーロッパで芸術を学ぶ機会を得るとともに、優れた芸術作品を蒐集することができた。大原孫三郎は、児島虎次郎の提案にしたがって、1930年に大原美術館を創設した。大原美術館は、今日も倉敷美観地区⁷⁾の中心的存在として多くの観光客を集め、倉敷の高い文化的水準と伝統的街並みに大きな貢献をしていると評価できる。

関西地方で事業に成功した足立全康(1899~1990年、島根出身)は、横山大観(1868~1958年、水戸出身)、北大路魯山人(1883~1959年、京都出身)の作品を熱心に蒐集し、1970年に足立美術館を創設した。足立美術館は、著名な日本画を多く所蔵していることから有名観光地になっているが、「昭和の小堀遠州」と称された中根金作(1917~1995年、磐田出身)⁸⁾に作庭を依頼した築山林泉式庭園の「白砂青松庭」(1号館庭園)、「枯山水庭園」(2号館庭園)などは海外でも高く評価されている。足立全康は、美術館を自然景観や四季折々の変化と調和した開放的な芸術空間と捉え、「生の額絵(Living Framed Painting)」と称して、額縁に見立てた窓の向こうに広がる日本庭園の世界⁹⁾を鑑賞できるように美術館全体を設計している。孫の足立隆則によれば、足立全康は日本庭園を「一幅の絵画である」と認識し、「芸術鑑賞と自然観照が同時に満喫できる<美の理想郷>」というコンセプトにもとづき、「世界に誇れる日本庭園」をつくった(足立隆則 2007: 307-308)。さらに足立全康のこだわりは、茶室の寿立庵にも及んでおり、「桂離宮にある小堀遠州作『松琴亭』の面影を映した茶室」(足立 2007: 190)と説明する。

このように全体的に調和した芸術空間を創出していることから、日本庭園専門誌*The Journal of Japanese Gardens*¹⁰⁾が毎年発表する格付けで、足立美術館は、初回(2003年)から桂離宮を抑えて「20年連続日本一」を誇る。足立全康は、世界に誇れる「文化国家日本」をつくり、「人間同士の精神交流、文化交流を深めることが、現在の日本にとって焦眉の急」であると述べ、足立美術館の社会的使命を表明している(前掲: 287)。足立美術館は、大原美術館と同様に、外国人観光客を含む多くの来館者が集まる有名観光地の一つになっている。

芸術家が社会的認知度を得て、活動機会を拡大するためには、才能や努力によって卓越的な作品を制作するだけでなく、その作品が多くの鑑賞者に評価されることが条件になる。この意味で、美術館は、芸術作品がただ陳列されるだけの物理的空間ではなく、芸術家(たとえ、その人物が存命ではなくとも)が作品の展示を通じてみずからの世界を表現する一方で、多くの一般来館者や鑑識眼のある文化人がその作品にまなざしを向けて評価する「舞台」であると言ってよい。そして、I.ゴッフマンの演技論的行為論(Goffman 1959=1990)を踏まえて論ずるならば、芸術作品が展示される建築物、それを取り巻く庭園や街並みなどの「舞台」は、芸術家/芸術作品や来館者が集まり、「みせる/演出する」「鑑賞する/まなざす」「語る」「聴く」という文化実践を遂行する場所となる。そして、多様な主体が織り成すこのような文化実践は、そこに絶えず新たな価値を創出し、人びとが集まる連鎖をつくりだすことで、持続的に文化人ネットワークが形成/拡大される場所を構築/再構築するだろう。この意味において、美術館の価

値を生み出すのは芸術家／芸術作品や鑑識眼をもった鑑賞者だけではない。文化実践を遂行する場所を創設し、またその理念を実現させた実業家の文化的意義は、芸術家や鑑賞者と同様に重要である。

本節では、19世紀後半から20世紀初頭にかけて創設された高等教育機関(東京大学、早稲田大学など)、文化団体(帝国美術院／日本芸術院など)、美術館などの文化施設が文化人ネットワークの拠点として機能し、またそこに集まる多様な文化主体による文化実践が価値を創出することで、文化空間を生きた場所にするということを明らかにした。

3 糸魚川が生んだ相馬御風と文化人ネットワーク

(1) 東京を拠点とした文化活動とその展開

前節では、大都市の高等教育機関を拠点に形成された文化人ネットワークについて論じたが、本節以降は、さまざまな領域で活躍し、糸魚川の文化財を生み出した文化人とその越境的ネットワークについて考察する。まずは糸魚川が生んだ相馬御風の幅広い文化活動とネットワークについて論じてみたい¹¹⁾。

相馬御風(1883～1950年)は、1902年4月に故郷の糸魚川を離れて早稲田大学に進学し、そこで広げたネットワークを拠点としながら文芸活動に尽力した人物であり、1916年の糸魚川退住後も1950年に没するまで幅広い文化活動を展開した。相馬御風の文化活動は、文芸活動、作詞(早稲田大学校歌「都の西北」、歌謡曲「カチューシャの唄」、童謡「春よ来い」など)、ロシア文学の翻訳¹²⁾、良寛研究¹³⁾、郷土研究など多岐に渡り、幅広い領域で活躍する卓越な文化人と交流を続けた。

相馬御風の文芸活動とネットワークを概観してみよう。10代半ばから短歌を学んでいた相馬御風は、18歳だった1901年に真下飛泉(1878～1926年、京都出身)の紹介で新詩社に入会した。相馬御風は、第三高等学校(現京都大学)の入学試験を受験するために京都を訪れ(結果は不合格であった)、そのときに真下飛泉と知り合い、交友関係を深めていった。新詩社は、与謝野鉄幹(1873～1935年、京都出身)らが1899年に創設した団体で、1900年に機関紙『明星』を創刊した。浪漫主義文学で名声を得た『明星』は、与謝野晶子(1878～1942年、大阪出身)、石川啄木(1886～1912年、盛岡出身)、北原白秋(1885～1942年、東京出身)、高村光太郎(1883～1956年、東京出身)¹⁴⁾、前田林外(1864～1946年、兵庫出身)といった詩人や歌人が活躍する場となった。相馬御風は、1902年4月に早稲田大学に進学したあとも新詩社で文芸活動を続け、『明星』に短歌や詩を発表した。相馬御風の作品は、特に石川啄木に高く評価されていた(金子 2010: 35-38)。

しかし、1903年、相馬御風は新詩社を退会し、前田林外や岩野泡鳴(1873～1920年、兵庫出身)らと東京純文社を創設し、機関紙『白百合』を刊行した。金子善八郎は、相馬御風や前田林外の『明星』退会の動機はよく分からないと述べるが(金子 2010: 39)、森鷗外と文学論争を重ねた坪内逍遙のもとで文学を学んだことがその一因であったと推測できる。『白百合』は、1907年4月に終刊したが、相馬御風が自然主義文学へと傾倒するうえで重要な意味をもったと言えるだろう。

さらに、相馬御風は、恩師の坪内逍遙や島村抱月(1871～1918年、島根出身)とも文芸活動を展開するようになった。1906年に坪内逍遙と島村抱月が文芸協会を創設し、休刊していた『早稲田文学』(1891年

に坪内逍遙が創刊)を復刊すると、相馬御風は早稲田文学社(編集部)に入り、自然主義文学の成長に貢献した。1907年には、三木露風(1889~1964年、東京出身)、野口雨情(1882~1945年、茨城出身)らとともに早稲田詩社を創設し、口語自由詩を推進した。

また早稲田大学の歴史に相馬御風の名を刻んだのは校歌「都の西北」であった。1906年、早稲田大学創設25周年記念の一環で校歌制定が企画された際に、その歌詞を募集したものの、坪内逍遙と島村抱月の審査を通過できる作品がなかったことから、相馬御風に作詞を依頼した。坪内逍遙と島村抱月が相馬御風の才能を高く評価していたことがうかがえるだろう。そして、恩師である二人の期待に応えるべく、1907年に相馬御風が完成したのが「都の西北」であった。

このように、相馬御風は、早稲田大学を拠点に文芸活動を展開しながら自然主義派ネットワークを広げていった。早稲田大学出身の自然主義派には、国木田独歩(1871~1908年、銚子出身、ただし中退)や正宗白鳥(1879~1962年、岡山出身)がいた。1908年には、相馬御風は、岩野泡鳴、正宗白鳥、田山花袋(1872~1930年、群馬出身)といった自然主義派の文人らとともに、南湖院(茅ヶ崎)で結核療養中の国木田独歩を見舞っている(金子 2010: 60)。

以上のように、相馬御風は、多くの著名な文人たちと文芸活動を展開しながら、1913年には島村抱月が務めていた『早稲田文学』編集責任者を引き継ぎ、文人ネットワークの結節点としての役割を果たすようにますます期待された。

他方、相馬御風の文芸活動は大きな転換期を迎えた。1913年、島村抱月は、妻子がいながら、松井須磨子(1886~1919年、長野出身)との恋愛が発覚し、坪内逍遙との関係を悪化させて、文芸協会を退会せざるをえなくなった。そこで、島村抱月が劇団芸術座を結成すると、相馬御風は、松井須磨子らとともに参加した。芸術座が上演した『復活』(トルストイ)の劇中歌「カチューシャの唄」は、島村抱月が1番、相馬御風が2番から5番までを作詞し、島村抱月のもとで書生をしていた中山晋平(1887~1952年、長野出身)¹⁵⁾が相馬御風の進言で作曲した。松井須磨子がそれを歌い、全国巡業¹⁶⁾やレコード販売によって、全国的な流行歌となった(永嶺 2022: 82-83)。加えて、この当時、青年知識人層のあいだでトルストイ文学とその人道主義思想の人気が高く(前掲: 8-9)、また島村抱月も「前早稲田大学教授という肩書きと文学・芸術に関する文名の高さ」(前掲: 110)から「知的憧憬の対象としてカリスマ的な存在」(前掲: 11)であったため、「芸術座が地方知識階級のファンを獲得する上で、現在の私たちが想像する以上の力を発揮した」(前掲: 110)。

なお、松井須磨子は、楽譜が読めず、また歌唱力も高いとは言えなかったことから、中山晋平が丁寧に音楽指導をしたと言われる。しかし、「カチューシャの唄」の成功は、中山晋平にとって、音楽家としての名声を全国的に知らしめる転換期となった(金子 2010: 57)。その後も、相馬御風と中山晋平は、共同で数多くの校歌や童謡をつくり続けた。「カチューシャの唄」は、興行的に成功した点のみならず、各分野で活躍する文化人の才能を最大限に発揮し、それを融合したという点で注目すべきであろう。

(2) 糸魚川退住と文化活動

このように、相馬御風は、東京で幅広い分野で文化活動を展開し、多くの著名人とのネットワークを

拡大していったが、1916年、『還元録』のなかで、都会における「永い間の思想的放浪生活」に精神的苦悩を深めている心境を告白し、「失はれつつあった私の心の統一を取り戻」すべく「心の故郷」である糸魚川への退住を表明した(相馬 1916=1993: 168-170)。

ところで、「永い間の思想的放浪生活」とは何を指しているのだろうか。糸魚川に退住したあとも精力的に文芸活動を実践していたことを考えると、東京での文芸活動を全面的に否定したとは考えにくい。本節では、ここまで相馬御風の文芸活動に限定して論じてきたが、彼は個人の自由や理想社会の実現をめぐる言論活動でも注目されていたので、その点についてもごく簡単に触れておきたい。

19世紀以降、欧米諸国を中心に社会主義思想・運動が世界的に広がり、日本でも、1903年に幸徳秋水(1871~1911年、高知出身)や堺利彦(1871~1933年、福岡出身)らが創設した平民社を皮切りに社会主義運動が展開された。このような時代背景のなか、1912年以降、相馬御風も大杉栄(1885~1923年、丸亀出身)らの影響を受けながら社会主義思想に傾倒していった。しかし、相馬御風は、階級的視点から社会革命を訴える大杉栄と『近代思想』上で議論を重ねていくなか、内面的な個人革命を主張するなど、やがて社会主義思想から離れていった(金子 1977: 41; 金子 2010: 63-64; 松澤 1993: 5-6; 大和田 2014: 4-5)。大逆事件(1910年)をはじめ、社会主義者や無政府主義者に対する国家権力による思想統制が強まる時代であって、相馬御風は慎重な発言を意識していたはずである。

このような状況のなか、相馬御風を萎縮させる出来事が起こった。相馬御風が1913年に島村抱月から編集責任者を引き継いだ『早稲田文学』の第120号(1915年11月号)と第122号(1916年1月号)が発禁処分となった。『早稲田文学』第120号の発禁処分に関しては、大杉栄や吉野作造(1878~1933、逗子出身)の論考を掲載しており、国家権力の政治的動機が強く働いた結果であったと推測できる。発禁処分の理由は「秩序紊乱」という不明確なものであったが(金子 2010: 67)、相馬御風を萎縮させるには十分な理由であったと言える。

ただ、このような政治的背景だけで、糸魚川に退住した相馬御風の動機を十分に説明できるだろうか。相馬御風は、「キリスト教人間愛」に根差し、「道徳的自己完成」を目指した簡素な農民生活を理想としたトルストイに影響を受けていたことはよく知られている(松澤 1993: 4)。14年間にわたる都市生活に疲れ、「心の故郷」に回帰したい(相馬 1916=1993)というのは偽らざる本心であったとも推測できる。

糸魚川に帰ると、相馬御風の活動は、良寛研究、「木蔭の会」創設(1916年)、雑誌『野を歩む者』創刊(1916年)、長者ヶ原遺跡の発掘調査など多岐に渡って展開されていった。相馬御風は、良寛に関する著書を20冊近く出版するなど、特に良寛研究に尽力したことで知られている。これを理由に相馬御風宅¹⁷⁾を訪問する文化人は少なくなかった。陶芸、書道、絵画、料理などの分野で著名な北大路魯山人は、1938年2月に相馬御風が所有する良寛の遺墨を鑑賞するために糸魚川を訪れている。このとき、良寛の遺墨に対して二人が示した評価が合致したことから、お互いに敬意を深めたようで(金子 2015: 6-7)、北大路魯山人の手紙から、同年7月と8月にも相馬御風を再訪したことがうかがえる(糸魚川歴史民俗資料館 編 2009: 123-125)。8月の訪問では、地元の食材を買い求めて料理をふるまい、その後も良寛の遺墨に対する評価をめぐる交流が続いた。

また後述する澤田政廣(1894~1988年、熱海出身)は、1923年9月1日に関東大震災が起り、当時住

んでいた東京から糸魚川と名古屋を經由して故郷の熱海へ避難するために、糸魚川出身の弟子・石塚裕康(1894~1957年)¹⁸⁾の実家に逗留した際、相馬御風に面会する機会を得た。かねてから相馬御風は、澤田政廣の作品を高く評価しており、それで石塚裕康が紹介したようである。相馬御風と澤田政廣の出会いとその後も続くつながりは、谷村美術館の創設にもつらなることから、後に詳述したい。

文芸活動の他にも、長者ヶ原遺跡の発掘調査や翡翠産地の「世紀の大発見」に貢献した人物としても、相馬御風は評価されている(金子 2015: 38)。翡翠はミャンマーや中国でしか産出されないというのが当時の通説であったが、相馬御風は「小滝川(姫川上流)に必ずある」と主張し、協力者に依頼したところ、実際に1938年に小滝川で翡翠が発見された。なお、相馬御風は、本件に関する記録を残しておらず、「謎の沈黙」と呼ばれており(前掲: 38)、またこのような推測に至った根拠は不明である。『古事記』(712年)に登場する奴奈川姫が翡翠の装飾品を身に付けていることに着目したという見解もあるが、相馬御風は考古学的な知識ももっており、長者ヶ原遺跡から出土した石器、姫川や海岸の石のなかに翡翠があったことから、糸魚川に翡翠産地があると推測したと考えられる(前掲: 31)。

小滝川ヒスイ峡は、1956年に「小滝川硬玉産地」として国の天然記念物に指定され、2016年には翡翠が日本鉱物科学会によって国石に選定された(なお、2022年11月、新潟県によって「県の石」に指定されている)。また後述する糸魚川出身の実業家・谷村繁雄(1916~1986年)も翡翠の文化的価値を高く認め、1978年には巨大な翡翠を配置した翡翠園を開園し、同じ敷地内に翡翠美術館を創設した。さらに1971年に長者ヶ原考古館(同年に長者ヶ原遺跡が国の史跡に指定された)、1994年にはフォッサマグナ・ミュージアムが開館し、翡翠の考古学的な意義が説明されている。

今日、糸魚川は、翡翠をコンテンツとした観光プロモーションを進めるとともに、まちのいたるところで相馬御風の功績を称える碑が設置されている。相馬御風を知る一般の観光客は多くないかもしれないが、糸魚川に多くの文化人が集まったのは、相馬御風のようなキーパーソン(また相馬御風とつながりのある文化人ネットワーク)がいたからであろう。このように、相馬御風は、精力的に文芸活動や郷土研究を展開するなかで、越境的な文化人ネットワークを形成し、過去・現在・未来をつなぐ重要な役割を果たすなど、今日につらなる糸魚川の文化的なまちづくりに貢献していると評価できる。

4 翡翠園、玉翡翠園、谷村美術館 —— 領域を超えた文化人ネットワークとその貢献

(1) 中根金作と日本庭園 —— 足立美術館から翡翠園・玉翡翠園へ

相馬御風とならび、時代を越えて糸魚川の文化的発展に貢献した人物として、実業家・谷村繁雄を挙げなければならない。1938年に谷村建設を創業した初代社長の谷村繁雄は、日本庭園や芸術作品の熱心な愛好家で、翡翠園を開園した人物であることは上述したとおりである。谷村繁雄は、小滝川ヒスイ峡が1956年に国の天然記念物に指定される以前から、糸魚川産や外国産(ミャンマー、中国、ブラジルなど)の翡翠原石や彫像などを蒐集した。また1960年代には甲府から呼び寄せた水晶職人が翡翠装飾品を製作し、それを市内で販売したところ、広く好評を得たことから、「ヒスイ加工のパイオニア的存在」と称されるようになった(『新潟新報』1979年4月28日)。しかし、谷村繁雄は、販売目的の翡翠製品にとどまらず、より芸術性の高い翡翠彫像への関心を強めていった。翡翠園の敷地内にある翡翠美術館には、数多くの

翡翠彫像が展示されており、翡翠の文化的価値に対する谷村繁雄のこだわりがうかがえる。

さらに、芸術に対する谷村繁雄の情熱は、翡翠コレクションにとどまらず、翡翠園（1978年）、玉翡翠園（1981年）、谷村美術館（1983年）の創設へと向けられていった。

谷村繁雄は、翡翠園と玉翡翠園を作庭した中根金作にどのように出会ったのだろうか。中根金作によれば、1976年春、谷村繁雄は、足立美術館を訪れて、「私の人生の中で最も充実した会心の作」（浜松市美術館 1998: 28）と自負する「白砂青松庭」をはじめとする日本庭園に感銘を覚えた。谷村繁雄は足立全康にその作庭者を問い、それが中根金作であることを知ると、京都下鴨にある事務所に電話をかけ、その直後に本人が訪問してきたとのことであった（中根 1989: 56）。

谷村繁雄の依頼を受けた中根金作は、糸魚川で翡翠園の作庭に取り掛かった。翡翠園は、山々を借景として、滝、池、曲水から構成される池泉回遊式庭園であるが、谷村繁雄が特にこだわったのが多くの巨石とその配置である。ひと際目立つのが70トンもあるコバルト翡翠の原石で、入口付近に配置された。谷村繁雄によれば、このコバルト翡翠は、姫川上流で発見されたもので、県の許可を得て掘削したとのことである。『新潟新報』（1979年4月28日）のなかで、谷村繁雄は、この過程で大型ブルドーザーや150トンクレーン車などの巨大重機を動員し、90トントレーラーで巨大なコバルト翡翠を運搬したというエピソードを紹介している。このコバルト翡翠の他にも谷村繁雄は次々と巨石を運び込み、そのたびに苦勞しながら庭園のデザインを調整したと中根金作を述懐している（中根 1989: 56）。

1978年9月に翡翠園が完成すると、玉翡翠園の作庭が続き、1981年に開園された。玉翡翠園は、足立美術館の日本庭園と同様に、庭園の向こうに広がる山を借景とし、喫茶スペースに入ると、額縁に見立てた大きな窓を通して「一幅の絵画」として鑑賞できる。そして、その景色は、四季の変化とともに移ろいでき、一年を通じて楽しむことができる。

中根金作は、谷村繁雄を「晩年は庭園建造に情熱を傾けられた文化人」と評している（1989: 56）。谷村繁雄は、糸魚川の翡翠園と玉翡翠園に続き、第二次世界大戦後に大陸に残された多くの日本人残留孤児を育ててくれた中国人に感謝すべく、1984年、中根金作に作庭を依頼し、糸魚川産の石を配置した翠石園を北京市に寄贈した。完成までの間、谷村繁雄は20回も現地を訪問したようで（前掲: 57）、翠石園に対する熱意がうかがえる。なお、中根金作は「中国は日本庭園のルーツである」と述べながら、「その母なる国の中国の地に、昔、中国から日本に伝来した庭園技術が、かく発達したのであると説明する意味をもって、伝統的な形態である築山林泉式の日本庭園を設計した」とその意図を示している（前掲: 57）。翠石園に続いて、1986年に新潟市内に建造された天寿園は、北京市園林局に派遣された技術者による中国庭園、中根金作の作庭による築山林泉回遊式の日本庭園から構成されている¹⁹⁾。

このようにして日本庭園の建造に尽力した谷村繁雄の情熱は、同時に谷村美術館の建設にも向けられていた。次に谷村繁雄がアプローチしたのは、彫刻界の第一人者・澤田政廣であった。

(2) 谷村美術館の構想 —— 相馬御風に対する澤田政廣の敬意

澤田政廣の回想によれば、1978年に「奈良のお寺に預けてあったわたしの作品」をみた谷村繁雄から入手したいとの申し出があり、さらに澤田政廣の作品だけを展示する美術館を創設したいとの意向を伝え

てきた(澤田 1984b)²⁰⁾。双方の話し合いは継続されたようで、1980年春、澤田政廣が翡翠園を訪れ、その美しさに深く感銘を受けたと言われる(『新潟日報』1983年5月25日)。この時点で、谷村美術館の構想が実現に向けて進展し、1981年には、玉翠園に隣接する谷村美術館の建設予定地に弟子とともに訪れている(前掲)。

谷村繁雄の情熱や日本庭園の芸術性に加えて、谷村美術館の創設に対する澤田政廣のモチベーションとなったのは、やはり相馬御風との出会いであろう。上述したように、1923年に糸魚川で相馬御風と出会い、それ以降も交流を重ねてきた事実にも触れないわけにいかない。相馬御風は、澤田政廣の作品を譲り受けて、それを大切にしていたらしく(『朝日新聞』1981年5月11日)、その後も澤田政廣の芸術活動に関心をもっていた。1929年、相馬御風は、澤田政廣が第10回帝展に「白鳳」を出品した際に祝電を送っており、同年10月26日、それに対して澤田政廣は礼状を書いている(糸魚川歴史民俗資料館 編 2009: 280)²¹⁾。また、1936年、澤田政廣が文部省美術展覧会招待展で「光明佛身」²²⁾を出品した際、相馬御風は、同年6月11日付の手紙(谷村美術館所蔵)において「美術雑誌」²³⁾で作品を「拝見驚嘆」したと称賛し、それに対して、澤田政廣は6月12日付の礼状で「甚だ拙い光明佛身に先生のお褒の言葉を戴きまして全く恐縮に存じます」と感謝の意を述べている(糸魚川歴史民俗資料館 編 2009: 283)。

相馬御風は、主に文人として高く評価されていたが、幅広い芸術領域²⁴⁾に通じた卓越的な鑑識眼をもった人物として知られていたことは上述したとおりである。著名な文化人である相馬御風に評価されたことは、当時、まだ若かった澤田政廣に大きな自信になったはずである。また、澤田政廣は「内面からわき出るもの、腹の真底から出てくるもの、それを時代に即応した新しい形式で発表する、それが私の仕事だ」(熱海市立澤田政廣記念美術館 編 2007: 148)と述べているのだが、このような芸術観は、相馬御風の自然主義的な文学観にも通ずる点があり、お互いに共感するところがあったのかもしれない。

加えて、澤田政廣が相馬御風の人柄に好意を抱いていたことも、澤田政廣が「心の故郷」(『朝日新聞』1981年5月14日)と称するなど糸魚川に特別な感情をもっていた理由になっていたと言えるだろう。1928年に糸魚川大火が発生し、相馬御風の邸宅が消失したことを知り、澤田政廣は、8月21日、8月31日付の見舞い状を書き(糸魚川歴史民俗資料館 編 2009: 278-279)²⁵⁾、また1932年に相馬御風の妻・テルが死去した際にも同様に、澤田政廣は7月12日付で弔慰の手紙を送っている(糸魚川歴史民俗資料館 編 2009: 281)。1950年に相馬御風は死去するが、その後も澤田政廣は感謝の気持ちを抱き、また糸魚川に愛着をもち続けたことから、谷村繁雄の提案に喜んで合意したようである。

(3) 谷村美術館の誕生へ ―― 彫刻家・澤田政廣と建築家・村野藤吾の合作

そして、谷村美術館の誕生は、建築界の巨匠・村野藤吾(1891~1984年、唐津出身)なしには実現しえなかつただろう。村野藤吾は、糸魚川とも谷村繁雄とも直接的なつながりをもたなかつたが、澤田政廣は、二人が「何かの受賞でご一緒になって以来」、親しい関係にあったと述べている(澤田 1984b)。この記述は、曖昧な表現であるが、二人が1953年に日本芸術院賞を受賞したことを言及していると推測できる。村野藤吾は1955年に、澤田政廣は1962年に日本芸術院の会員になっており、「同じ芸術院の会員として旧知の間柄」であった(松隈洋 監修・笠原一人 他 編 2015: 211)。日本芸術院は、異なる領域で活躍する卓越

的な文化人がネットワークを構築し、新たな芸術活動を創出しうる結節点^{ハブ}として機能したことがうかがえる。このような経緯から、谷村繁雄は、澤田政廣の強い希望に応じて、村野藤吾に建築設計を依頼し、二人の合作として谷村美術館の構想が実現した。

谷村美術館には、先述した「光明佛身」(1936年)、「曼珠沙華」(1959年)、「金剛菩薩像」(1969年)などを含む彫刻10点が展示されることになった。「金剛菩薩像」は、もともと高野山金剛峯寺金堂のために制作した作品であるが、谷村美術館で展示するために同じものを制作した。村野藤吾は、シルクロードをイメージして谷村美術館の全体像を設計した。数寄屋造りの回廊は法隆寺を想起させるが、砕いた石灰石を敷いた前庭はシルクロードの砂漠のようである。そして、谷村美術館は、敦煌の石窟寺院を連想させる神秘的な空間設計になっており、村野藤吾が手掛けたこれまでのモダニズム建築とは一線を画していると言えるだろう²⁶⁾。

一般的にモダニズム建築は、時代や地域性を問わず、普遍性を志向する傾向があると言われる。建築家の田根剛は「世界に等価に同じクオリティの建築を満たしていくというモダニズムの思想」に従えば「世界中で同じものが建つべきです」と述べる一方で、谷村美術館は「地域性や土着性」「場所のあり方や歴史の繋がり」を意識した建築物であると評価する(石上・田根 2021: 86-87)。実際に、谷村美術館は、その周りに配置された石と同様に、大地に深く根を下ろし、また大地の底から生まれるかのようにそびえたっている。

谷村美術館のなかは、澤田政廣の作品を包みこむ「洞窟」が非直線的に配置されており、鑑賞者は巡礼者のごとく、向かうべき先の「洞窟」にたたずむ仏像に導かれながら次の「洞窟」へと歩みを進めていく。館内はやや薄暗い洞窟のようであるが、天井や壁面の窓からは自然光が差し込み、時間帯、季節、鑑賞者の気分などによって、「洞窟」の雰囲気や作品の表情は異なってくる。谷村美術館は、悠々と流れる時間と光／影を織り成しながら仏像のアウラを効果的に演出し、「巡礼者」が没入できる神秘的な世界を創出している。

1983年、澤田政廣と村野藤吾の合作である谷村美術館が完成した。澤田政廣は、このときのことを次のように回想する。

「冬が去り、春が来て完成の報を受けた。曾遊の地、糸魚川でわたしを迎えてくれたのは、わたしの作品たちをまるで母親の胎内のように安らかに包むすばらしい美術館であった。」(澤田 1984b)

(4) 糸魚川の文化空間から澤田政廣記念美術館(熱海)へ

谷村美術館に展示されている澤田政廣の作品は、彫刻10点だけではない。谷村美術館には、裸婦の絵画6点、結跏趺坐の観音菩薩を描いた絵画²⁷⁾、三尊佛のデッサンがあり、また玉翠園の喫茶スペースには普賢菩薩の絵画が展示されている。この絵画には作品名はないが、「為谷村繁雄大人」と書かれており、谷村繁雄に対する澤田政廣の深い敬意を読み取ることができるだろう。

また、澤田政廣の作品は、谷村美術館だけではなく、翡翠園でも鑑賞できる。中根金作の日本庭園を一望できる小高い場所には、玉翠園の喫茶スペースに展示されている絵画と同じ普賢菩薩が彫られた石

碑が建っている。その横には「佛心 米寿 政廣」と刻まれた石碑が並んでおり、その制作年は示されていないが、澤田政廣が数え年で88歳になった1981年に建てられたものと推定できる。上述したように、澤田政廣が翡翠園を訪れ、その芸術性に感銘を受けたのが1980年であったことを想起すると、「佛心」の石碑は、翡翠園と谷村美術館を結びつける象徴的作品であったと解釈できるかもしれない。

また、翡翠園には、来園者が休憩できる、聴音舎という小さな建造物がある。日本庭園を臨む聴音舎に入ると、翡翠などの石などが展示されている横に「釈迦如来」(1942年)²⁸⁾が鎮座し、その背後には、澤田政廣の揮毫で「釈迦如来 九十四才 政廣」と書かれたステンドグラスが配置されている。澤田政廣は、1988年に93歳で死去しているので、「94歳」というのは数え年であろうが、いずれにせよ、最晩年に制作したステンドグラスを聴音舎に納めている。

このステンドグラスに絵付けをしたと推測されるのが、澤田政廣と交流があった今野満利子(1942～2019年、前橋出身)である。また、聴音舎の天井は、今野満利子が制作したステンドグラスで装飾されている。ほとんど関連資料がないのだが、これらの作品は、澤田政廣のネットワークとその軌跡がもたらした表現技法の変化を辿るうえで重要性が高いだろう。谷村美術館に続き、1987年に熱海で創設された澤田政廣記念美術館でも、澤田政廣の水彩画を今野満利子が絵付けした「飛天」(1987年)がエントランスの円形天井に設置されており、薄暗い館内に鮮やかな輝きを与えている。

この澤田政廣記念美術館の外観は、村野藤吾が設計した谷村美術館を模している²⁹⁾。館内の空間は、必ずしも村野藤吾の建築物を再現してはいないが、鑑賞者の歩みをいざなう経路は曲線的に設計され、いくつかの「洞窟」が澤田政廣の作品を包みこんでいる。そして、先述のステンドグラスが演出する光と影は、自然光が差し込む谷村美術館にも通ずるところがあるだろう。

また、澤田政廣記念美術館に展示される作品にも触れてみたい。第3回帝展で初入選となった「人魚」(1921年)は、谷崎潤一郎『人魚の嘆き』(1919年)をモチーフにした彫刻である。谷崎潤一郎と面識がなくとも、澤田政廣が文学作品に関心があったことがうかがえる。さらに注目したいのが、第6回日展に出席した「隠者」(1963年)である。この彫刻は、坪内逍遙『役の行者』(1917年)をモチーフにした作品である。澤田政廣は、おそらく坪内逍遙と面識はなかったが、相馬御風の恩師であったことは知っていたはずである。

興味深いことに、澤田政廣記念美術館の周辺には、相馬御風とともに生きた文化人の名前をいたるところでみることができる。坪内逍遙は、1912年に熱海に別荘を建て、1920年から死去する1935年まで住み続けた。相馬御風と早稲田大学で同期だった會津八一は、坪内逍遙の邸宅を「双柿舎」と名づけ、いまもその門には會津八一が揮毫した「雙柿舎」の扁額が掛かっている。また澤田政廣記念美術館が隣接する熱海梅園の敷地内には、相馬御風とともに「カチューシャの唄」を作曲した中山晋平が1944年から1952年まで住んでいた邸宅が残されている。相馬御風は、そもそも熱海とつながりがないので、この地で言及されることがないのは当然だろうが、時空を超えて、東京や糸魚川で相馬御風とつながりをもった文化人が澤田政廣記念美術館とその周辺に合流し、ハイブリッドな文化空間を形成している。

5 多様なひとが集まる、生きた文化空間へ

本論は、人の移動に伴うネットワークの形成・拡大とその社会的・文化的効果を問い、特に、糸魚川出身の相馬御風や谷村繁雄を結節点とした文化人ネットワークによって、翡翠園、玉翡翠園、谷村美術館が創設された過程を論じた。相馬御風や谷村繁雄は、糸魚川、東京圏、関西地方で多くの人たちと出会い、直接的・間接的に、中根金作、澤田政廣、村野藤吾がこの地に集結する契機をつくった。そして、日本庭園、彫刻、建築の巨匠は、糸魚川の自然景観や歴史性を背景にそれぞれの才能を発揮し、ハイブリッドな文化空間を創出した。ただし、この卓越的な文化人は、自己完結した閉鎖的な世界観のなかで才能を発揮したのではない。中根金作、澤田政廣、村野藤吾は、東京圏や関西地方をめぐる、同じ分野のみならず、異なる領域で活躍する文化人と交流を重ねながらネットワークを拡大し、活動の場を広げていった。翡翠園、玉翡翠園、谷村美術館は、中根金作、澤田政廣、村野藤吾の世界が融合した重層的な文化空間である。

そして、相馬御風、谷村繁雄、中根金作、澤田政廣、村野藤吾がこの世を去ってから、長い年月が経過しており、玉翡翠園、翡翠園、谷村美術館は、歴史的な「遺産」となっているが、そこには、絶えず鑑識眼をもった鑑賞者が訪れ、「まなざす」「語る」「聴く」「共感する」といった双方向のかつ多角的な文化実践を遂行する文化空間がいまなおも生き続けている。

この文化空間の補完的機能を果たしている玉翡翠園の喫茶スペースにも着目してみたい。この喫茶スペースは、谷村美術館で澤田政廣の作品を鑑賞したあと、抹茶を飲みながら中根金作が作庭した日本庭園を鑑賞できる場所であり、また建築家／学者、芸術家、芸術愛好家、観光客など、幅広い関心をもった来場者が合流する文化空間としても機能している。そこには村野藤吾が制作した谷村美術館の建築模型・設計図が展示されており、建築を学ぶ若い学生はもちろんのこと、多く建築家／学者が視察に訪れている。また芸術家が個展を開催し、絵画、陶芸、写真などの作品を展示する場所になることもある。芸術家はその場にいる場合は、来場者とのあいだで作品をめぐる対話が発生するし、そこを訪れた文化人とのあいだでネットワークが形成される契機にもなりうる。

さらに、玉翡翠園の喫茶スペースは、谷村美術館が各領域の専門家の協力を得ながらフォーラムや特別展示イベント³⁰⁾を開催し、村野藤吾の建築、澤田政廣の彫刻、中根金作の日本庭園がもつ芸術的・歴史的価値について多角的な観点から議論する場となっている。このような谷村美術館の取り組みと連動して、建築家／学者や芸術家を主要メンバーとする「谷村美術館を学ぶ会」は、幅広い文化人ネットワークを通じて、その芸術的・歴史的価値を研究し、その発信に努めている。

建築物、日本庭園、芸術作品のいずれにせよ、その価値を理解できる鑑識眼をもった卓越的な文化人や鑑賞者が継続的に訪れる文化空間にはさらに来場者が集まるという連鎖が起こる。逆に言うならば、たとえ芸術的価値が高い文化財であっても、それらに「まなざし」を向ける鑑賞者が不在ならば、その存在意義は半減し、ますます来場者は減少するだろう。E. カッツとP.F. ラザースフェルドが提唱した「コミュニケーションの二段階の流れ」モデルにしたがうと、情報はランダムに拡散するのではなく「影響力のある人びと (influentials)」を結節点としながら、ネットワークに沿って伝達される (Katz and Lazarsfelt 1955=2006: 44-45; 本田 2023: 49-50)。上述したように、専門家がインタープリターとして文化財の価値を言語化し、その評価をもとにしたストーリーや解説を来場者に伝達することができれば、知的好

奇心のある来場者は再訪動機を強め、またSNSで記事や写真を投稿するなど、情報発信と誘客に貢献することが期待できる。各領域の専門家だけではなく、幅広い来場者がそこに集まることで、その増収分を文化財保全やプロモーション活動に活用できるし、同時に、谷村美術館、玉翠園、翡翠園の価値に対する糸魚川市民の認識がさらに高まるかもしれない。かつて文化人ネットワークが構築した谷村美術館、玉翠園、翡翠園は、一部の専門家にしか理解できない自己完結的な閉鎖空間ではなく、これからも多様な人びとが往来し、幅広い文化実践が展開されるかぎり、新たな価値を創造する文化空間として生き続けるだろう。

謝辞

本研究の一部は、JSPS科研費「多文化ネットワークによる地域活性化とインバウンド観光振興に関する社会学的研究」（研究課題番号：18K11879、研究代表者：本田量久）の助成を受けたものである。

なお、本稿の執筆に先立ち、糸魚川市の谷村美術館、玉翠園、翡翠園、熱海市立澤田政廣記念美術館から資料・情報提供を受けるなど研究サポートをいただいた。また、「谷村美術館を学ぶ会」代表を務める田原実・糸魚川市議会議員からは、村野藤吾の建築や澤田政廣の彫刻に関する専門的な解説、観光振興に向けた文化財の有効活用に関する見解をいただいた。この場を借りて、感謝申し上げたい。

注

- 1) 1877年、東京医学校と開成学校が合併し、東京大学が創設された。1886年に帝国大学、1897年に東京帝国大学、第二次世界大戦後の1947年に東京大学に改称された。
- 2) 創設者は大隈重信。1902年に早稲田大学に改称された。
- 3) ギリシアで生まれた英国籍者で、アイルランド、フランス、米国、マルティニーク島を経て来日した。1896年、日本国籍を取得すると、小泉八雲と名乗るようになった。
- 4) 相馬御風と會津八一は、早稲田大学の同期で坪内逍遙のもとで英文学を学んだ。卒業後、二人は長らく会うことはなかったが、晩年の1946年、會津八一が糸魚川の相馬御風宅に訪れている。なお、會津八一と坪内逍遙はお互いに敬愛する関係であり、頻繁に手紙のやりとりを重ねていた。
- 5) ロバート・オーウェン(1771~1858年、英国)の社会改良主義、エベネザー・ハワード(1850~1928年、英国)の田園都市論といった実践的な思想に影響を受けて、みづからが経営する倉敷紡績(現クラボウ)や倉敷絹織(現クラレ)における労働環境や福利厚生を改善するとともに、労働者とその子どもたちの教育を重視する「人格向上主義」を謳った(兼田 2012: 40-54)。また、1919年には、学術的研究による社会問題の解明を目的として、大原社会問題研究所を創設し、高野岩三郎(1871~1949年、社会統計学)、大内兵衛(1888~1980年、経済学)、森戸辰男(1888~1984年、経済学)、宇野弘蔵(1897~1977年、経済学)、長谷川如是閑(1875~1969年、ジャーナリスト)といった著名な研究者が集まった(前掲: 139-143)。
- 6) 1902年、東京美術学校に入学し、1898年に大原孝四郎(孫三郎の父)が設立した大原奨学会の奨学生となっている。
- 7) 1979年に重要伝統的建造物群保存地区に指定された。

- 8) 1942年、東京高等造園学校(現東京農業大学)を卒業。1987年、大阪芸術大学総長に就任した。
- 9) 足立美術館の日本庭園は、足立全康が生まれ育った故郷・安来の自然景観を借景として設計されている。
- 10) 鎌倉で造園の修行経験がある米国人ダグラス・ロスが1998年に米国で創刊した雑誌。
- 11) 相馬御風の経歴、文化活動、ネットワークなどを調べる際、糸魚川歴史民俗博物館(相馬御風記念館)が編集した資料を参照した。
- 12) 英訳書を日本語に翻訳した。相馬御風が翻訳したものに、レフ・トルストイ『復活』(原著1899年、翻訳1915年刊行)、イワン・ツルゲーネフ『その前夜』(原著1860年、翻訳1908年刊行)などがあり、これらは後述の芸術座で上演された。
- 13) 相馬御風に良寛研究を勧めたのは、上述した會津八一と言われている。
- 14) 父は、彫刻家・高村光雲(1852~1934年、東京出身)で、東京美術学校(現東京芸術大学美術学部)を卒業。なお、高村光雲の弟子・山本瑞雲(1867~1941年、熱海出身)は、後述する澤田政廣の師匠であった。
- 15) 東京音楽学校(現東京芸術大学音楽学部)本科ピアノ科を卒業。
- 16) 1914年に帝国劇場ではじまり、1918年までに日本各地で444回上演した。
- 17) 現在一般公開されている相馬御風宅は、1928年の大火で消失したあとに再建されたものである。
- 18) 1927年、第8回帝展に「極光」を出展し、初入選した。このときに相馬御風から石塚裕康に祝辞が届いている。
- 19) しかし、谷村繁雄は天寿園が着工する直前の1986年に死去し、それ以降のプロジェクトは、息子の刈穂知行・谷村建設次期社長が継承した。
- 20) 澤田政廣は「奈良のお寺」としか述べておらず、また作品名も示していない。
- 21) 澤田政廣は「白鳳」について「漸く推選となり入落の心配だけはありませんでした」(糸魚川歴史民俗資料館 編 2009: 280)と謙遜したが、本作品は特選に選ばれた。
- 22) 「光明佛身」は、谷村美術館で展示されている。その説明文によれば、「光明佛身」は光明皇后をモデルにした作品で、皇居に等身大の写真がある。
- 23) この手紙のなかで、誌名は示されていない。
- 24) 相馬御風は、さまざまな芸術作品や民芸品などを蒐集していた。糸魚川大火(1928年)で、自宅とともに、コレクション、資料、みずからの原稿などを消失したものの、残存するものは、糸魚川歴史民俗資料館(相馬御風記念館)などで展示・保管されている。
- 25) 坪内逍遙は、相馬御風宅の再建費用を集めるために、文化人200名とともに相馬御風の染筆を頒布する会をつくり、東京三越本店「短冊色紙展」(1936年)、日本橋「御風染筆展覧会」(1939年)を開催した(金子 2010: 91-92)。上述したように、1913年に相馬御風は島村抱月が創設した芸術座に参加し、それ以降、恩師である坪内逍遙に対して後ろめたい感情をもっていたようであるが、坪内逍遙はあまり気にしていなかった模様である。
- 26) 建築史家の長谷川堯は、京都工芸繊維大学で開催されたシンポジウム(2007年12月8日)において、村野建築は「過去の様式を否定した合理主義一辺倒のモダニズム建築とは、根本から違う」と述べ、その意義を高く評価している(「村野藤吾の建築 繊細さ再認識」『日本経済新聞』2007年12月15日)。
- 27) 「米寿」と記されているが、後述のように澤田政廣は数え年で自分の年齢を示したらしいので、制作年は1981年であると推測される。

258 越境的な文化人ネットワークとその機能

- 28) 1942年、正統木彫家協会第二回展で出品された作品。なお、澤田政廣は、1940年に日本木彫会を退会し、正統木彫家協会を結成した。
- 29) 村野藤吾は1984年に死去しており、澤田政廣記念美術館の設計に関わっていない。
- 30) 谷村美術館開館40周年記念パネル展「縁enishi——澤田政廣×村野藤吾 2人の巨匠による奇跡の美術館 完成までの軌跡」(2023年5月26日～9月24日)が開催された。

引用文献

- 足立全康, 2007, 『庭園日本一 足立美術館をつくった男』日本経済新聞出版社。
- 足立隆則, 2007, 「あとがき —— 祖父になり代わって」足立全康, 2007, 301-312.
- 熱海市立澤田政廣記念美術館 編, 2007, 『芸術の心を射抜く矢 —— 彫刻家のことば』熱海市立澤田政廣記念美術館 編。
- Bartram, David, et al., 2014, *Key Concepts in Migration*, London: Sage.
- Bryceson, Deborah, 2020, “Europe’s Transnational Families and Migration: Past and Present,” Deborah Bryceson and Ulla Vuorela eds., *The Transnational Family: New European Frontiers and Global Networks*, New York: Routledge, pp.31-59
- Florida, Richard, 2003, *The Rise of the Creative Class*, New York: Basic Books.
- Goffman, Erving, 1959=1990, *The Presentation of Self in Everyday Life*, London: Penguin.
- 浜松市美術館, 1998, 『中根金作とその庭の美 —— 日本庭園に捧げた生涯』
- 本田量久, 2023, 「スイス人ネットワークと農山村地域における観光振興／まちづくり」『応用社会学研究』65, 49-62.
- 石上純也・田根剛, 2021, 「見るべき知るべき日本の名建築は？」(対談:石上純也×田根剛)『Casa BRUTUS』(2021年1月号, 新・建築を巡る旅) 82-87.
- 糸魚川歴史民俗資料館(相馬御風記念館) 編, 2009, 『相馬御風宛書簡集 III —— 芸術家・芸能人・出版者・教育者・宗教家の書簡』糸魚川市教育委員会。
- 兼田麗子, 2012, 『大原孫三郎 —— 善意と戦略の経営者』中央公論新社。
- 金子善八郎, 1977, 『相馬御風ノート —— 「還元録」の位相』新潟日報事業社。
- , 2009, 「<地方の時代>の先駆者 —— 相馬御風の後半生」糸魚川歴史民俗資料館(相馬御風記念館)編, 3-15.
- , 2010, 『新潟県人物小伝 相馬御風』新潟日報事業社。
- , 2015, 『ヒスイ産地を発見した相馬御風』
- Katz, Elihu, and Paul F. Lazarsfeld, 1955=2006, *Personal Influence: The Part Played by People in the Flow of Mass Communications*, New Jersey: Transaction Publishers.
- 松隈洋 監修・笠原一人 他 編, 2015, 『村野藤吾の建築 —— 模型が語る豊饒な世界』青幻舎。
- 松澤信祐, 1993, 「『還元録』解説」相馬御風, 1916=1993, 3-11.
- 永嶺重敏, 2022, 『流行歌の誕生 —— 「カチューシャの唄」とその時代』吉川弘文館。
- 中根金作, 1989, 「谷村繁雄とその庭」『庭』65, 56-59.
- Putnam, Robert D., 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon and Schuster Paperbacks.

澤田政廣, 1984a, 「初入選の頃」『一枚の繪』(昭和59年3月1日号) 149, 76.

———, 1984b, 「谷村美術館のこども」『一枚の繪』(昭和59年12月1日号) 158, 40.

相馬御風, 1916, 『還元録』春陽堂. (=1993, 長谷川泉監修 近代作家研究叢書 149, 日本図書センター.)

大和田茂, 2014, 「1910年代の一元論 —— 大杉栄と平沢計七における<政治と文学>」『日本文学』63 (11), 2-11.

Urry, John, 2007, *Mobilities*, Cambridge: Polity.